

# 高卒無業者の教育社会学的研究 (1)

## —無業者輩出校と進路指導の分析—

耳塚寛明 (お茶の水女子大学)  
 粒来香 (東京工業大学)  
 ○大道真佐美 (お茶の水女子大学大学院)  
 ○諸田裕子 (お茶の水女子大学大学院)

小杉礼子 (日本労働研究機構)  
 ○長須正明 (東京都立工芸高等学校)  
 堀有喜衣 (お茶の水女子大学大学院)

### 序章 高卒無業者層へのアプローチ 問題意識と調査の概要

#### 第1節 問題の設定

##### 〈高卒無業者層の漸増〉

一般に高卒者が辿ることになる伝統的な進路は、第一に四年制大学と短期大学への「進学」、第二に直接実社会へと入る「就職」であった。これに70年代中葉以降、専修学校専門課程すなわち専門学校への入学が加わり、その後の鰻登りの入学者数の増加とともに第三の進路として定着してきた。事態に変化の兆しが現れたのは、90年代に入ってからである。90年代以降、高卒者の進路の中で、もっとも注目すべき変化をみたのは、いわゆる「高卒無業者層」の動向だった。「無業者」とは、高卒時点で、上級学校へ進学・入学する者、就職する者、死亡・データ不詳の者「以外」を指す。文部統計上のこのカテゴリは平成11年度学校基本調査速報版から「左記以外の者」に改称されたが、要するに、進学するでもない、就職するでもない者を指す。高卒者に占める無業者の率は92年の4.7%をボトムに漸増を続け、最新の99年には9.3%に至っている。実数にして12万7千人あまり、2000年春の卒業生に関してはほぼ間違いなく1割を超えただろう。

といってもこの数値は全国の全高卒者についてであって、全日制卒業者に比べて定時制卒業者で、また学科別には商業科や普通科で高いといった属性による差異がある。都道府県による差異も顕著で、沖縄県の27.4%は別格としても、神奈川県14.4%、東京都13.2%、宮城県13.1%から、3.1%の福井県、2.2%の富山県まで幅広く分布する。とりわけ無業者率が目立つのは、指定都市に所在する高校卒業者である。たとえばそのうちのひとつ、東京23区の公立高校男子卒業生を見ると(98年春)、卒業生約4人に1人が専修学校一般課程へと入学(23.4%、ほとんどは予備校)、これに次いで多いのが「無業者」(21.5%)である。無業者は、就職者よりわずかに多く、大学・短大進学者、専門学校入学者よりも数%多い。数値上、無業者は

第二の「進路」であり、5人に1人以上に及ぶもはや立派な多数派の進路となっている。

##### 〈高卒無業者層漸増の背景：問題群〉

高卒無業者は、いったいどこで、どのようにして生み出されてきたのか、そしてそれはいかなる帰結を高等学校教育さらには全体社会にもたらすことになるのか—これが、本研究の主要な問題である。90年代以降、高卒無業者層が漸増してきた背景には、以下のような複数の要因が関わっていると考えられる。

①高卒労働市場の逼迫 90年代初期に150万人を超えていた高卒求人数は99年には50万人を大きく割り込むところまで激減した。高卒求人倍率は3.32倍(92年)から1.16倍(2000年1月現在)へと急激な低下を見た。各高校にとって実質的に意味のある求人数は、求人倍率の低下以上に深刻だったといわれる。こうした高卒労働市場の逼迫には、もちろん景気停滞がもっとも直接的な影響を与えているだろうが、1) 高等教育進学率の上昇と平行に生起している、高卒から大卒への求人のシフト、2) 非正規労働市場の拡大(パートやアルバイトによる労働力の調達傾向の高まり)の影響も大きいだろう。

②高校生文化の変容 先行研究によれば、90年代以前の高校生に比べていまの高校生は、生活世界全体の中での学校生活の比重が低下している。それは学習への構えが否定的になったり、学習時間が減少したりといった変化に端的に現れているのだが、ではどこへ彼らの生活関心が向かっているのかを観察してみると、学校の外、とりわけ消費文化へと接近している。学校生活へのコミットメントの低下、生徒役割から逸脱した生徒層の増加、消費文化への接近などが、青少年の進路形成や職業意識の形成、とりわけフリーター志望と関係している可能性がある。

③教育理念や進路指導の変容 臨教審以降の教育政策のベクトル転換によって、教育指導は、「個性重視の原則」へとパラダイム・シフトを経験した。20年前の教員に比べると、いまの高校教員は、一定の「高校生らしさ」の中に生徒たちを押し込

める指導を後退させて、「脱生徒役割」に対して許容的となった。進路指導に関しても例外ではない。進路未定の生徒でも希望がなければ強いて就職先へと押し込めようとはしない、非現実的な職業志望ではあっても生徒の希望を尊重する、保護者が子どものフリーター志望を認めていけば学校は積極的に指導しない・・・内発的な進路意識の高まりに期待し、生徒たちの「個性的な進路選択」を尊重し、結果的ではあれ「進路未定」や「フリーター」を正当化する方向へと、進路指導は変化しつつある。この変化は、個性重視の原則のもとで「自分探しの旅」を支援する進路指導として、より肯定的な意味を与えられることもある。生徒の「進路保障」が学校の至上価値であった時代は過去のものとなりつつある。

④家庭的背景 高校生の進路選択には、家庭的背景が密接に関わっていることがすでに知られている。近年の少子化等を背景とした高等教育進学率の上昇によって、これまでわが国の高校生の進路選択を枠づけてきたトラッキングが弛緩し、階層的な進路の選好が、進路選択に対する影響力を強めている可能性がある。高卒無業者の漸増は、日本社会全体の「階層再生産」という構造的現象のひとつの局面であり、同時に階層分化が鋭さを増していく、まさに中心的なできごととして理解されねばならない。

## 第2節 調査の概要

われわれは、こうした問題群に接近するために、以下の調査研究を行った。

①文部省学校基本調査および高校総覧（リクルート）を用いた、既存統計分析

②高校進路指導に関する教員インタビュー調査  
対象：札幌市、東京都、富山県に所在する高等学校27校の進路指導担当教員27名。この3地域を対象としたのは以下のような理由からである。東京および札幌市は全国的に見ても無業者率が高い地域であるが、この2地域の無業者輩出のメカニズムは同じではない。同じ大都市圏でも東京に比べて札幌市は労働市場の状況が非常に悪いことから、札幌の無業者輩出には労働市場の要因が大きく関わっていると考えられる。一方富山県は全国の中で最も無業者率の低い地域の1つであるため、なぜ無業者率が低く保たれているのか、無業者発生のプロセスを比較する上で重要な地域である。  
調査時期：1999年10月～2000年2月

インタビュー内容：進路指導の実態および無業者予備軍の特徴

③高校教員対象の質問紙調査

対象：札幌市、東京都、富山県に所在する高等学

校27校に勤務する本務教員426名。

調査時期：2000年2月～5月

調査方法：質問紙による自計式調査。

調査内容：進路指導活動および進路指導観

回収票の構成：性別<男性306名 女性115名>、年齢別<40歳以下164名 41歳以上234名>、学科別<普通科進学校78名 普通科進路多様校224名 専門学科101名>

④高校2年生対象の質問紙調査

対象：東京都に所在する高等学校21校に在学する高校2年生2476名。調査対象校は、相対的に無業者を多く出している、いわゆる進路多様校。地域的バランスと学科を考慮して対象校を選定し、調査を受諾していただいた高校を対象とした。

調査時期：1999年11月～2000年1月

調査方法：質問紙による集団自計式調査。（なお、2001年2月に、パネル調査を実施予定）

調査内容：学校生活及び校外生活の過ごし方および進路展望

回収票の構成：性別<男性1106名 女性1341名> 学科別<普通科1752名 商業科373名 工業科246名 農業科・家政科105名>、進路希望別<就職640名 フリーター91名 専門・各種742名 短大119名 4年制大学591名 その他69名 わからない205名>

## 第3節 本報告の構成

本プロジェクトは、以下の2件に分けて報告を行う。

(1) 「高卒無業者の教育社会学的研究(1) 無業者輩出校と進路指導の分析」 9月16日午前III-5 進路と教育(3) 部会

1. 無業者はいつから、どこから生み出されてきたのか(大道真佐美) 文部省学校基本調査及び高校総覧(リクルート)を用いて、いつから、どこで無業者が生み出されてきたのかを明らかにする。

2. 無業者をめぐる進路指導と教育観(長須正明) 教員対象質問紙調査をもとに、進路多様校における進路指導、進路指導観を明らかにする。

3. 進路としての無業者 教師の認識と指導「理論」(諸田裕子) 進路指導担当教員対象のインタビュー調査を用いて、無業者という進路がどのように教員によって認識されているのか、そして、無業者という進路がどのようにして納得のいくものとして見なされ、現場の「実践理論」として組織されているのかを記述する。

(2) 「高卒無業者の教育社会学的研究(2) 大都市高校2年生調査の分析」 9月16日午後IV-5 進路と教育(4) 部会

東京都立高校2年生を対象とした質問紙調査の結果を用いて、以下の観点から分析・報告を行う。

1. 学校生活と進路展望（粒来香）
2. 青年文化と進路展望（堀有喜衣）
3. 進路分化の規定要因（耳塚寛明）  
（研究代表者）

## 第1章 無業者はいつから、どこから生み出されてきたのか

### 第1節 問題設定

本章では、近年漸増する無業者の生態について、全国（都道府県）の分布状況を把握し、さらに特定の3地域（札幌市、東京都、富山県）を取り上げ学校単位で時系列的な変化を明らかにしていく。

### 第2節 全国の「無業者」発生状況

#### （1）分析に用いるデータ

文部省による『学校基本調査報告書 平成11年度速報版』を用い、全国（都道府県）の「無業者」の発生状況を把握する。

#### （2）分析結果

当日、詳しいデータを配布する。

### 第3節 3地域の「無業者」発生状況

#### （1）分析に用いるデータ

東京都、札幌市、富山県の学校単位の分析に際しては、リクルート『高校総覧』の「卒業後の進路状況」の調査結果（毎年5月～9月実施）を用い、平成11年卒、平成6年卒、平成元年卒の3時点をとって過去10年の時系列的な分析を行った。『高校総覧』の進路別内訳で用いられている主なカテゴリーは、「大学進学者（四年制大学・短期大学）」、「専修・各種学校」、「浪人・予備校」、「就職者」、「その他」である。ここでは、「その他」に分類されたものを「高卒無業者」と捉えて分析する。説明変数として、学校階層（男子四大進学率を指標とする）、設置者、大学科、学校種別、設立年度を設定する。なお分析に際しては、「その他」に「浪人・予備校」の人数を含んでいる（あるいはそう疑われる）高校や、データの解釈が困難な高校などを除いた。

#### （2）分析結果

富山県を除き、東京都と札幌市の無業者は、この10年間で急激に増加していることがわかった。

表1-1 平成11年卒の無業者率と高校（%）

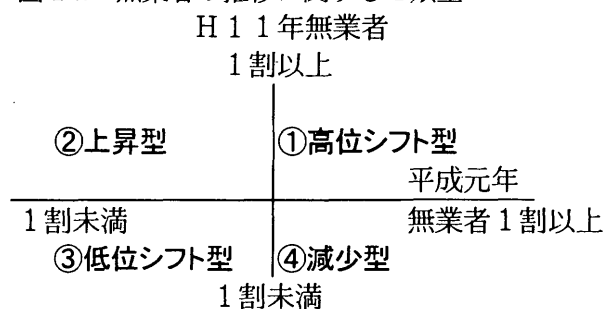
	札幌市	富山県	東京都
10.0%未満	66.1	100.0	74.3
10.0-19.9%	19.6		15.0
20.0-29.9%	5.4		7.3
30.0-39.9%	7.1		1.9
40.0-49.9%	1.8		1.0
50.0%以上			0.5
(N)	56	49	413

表1-2 平成元年卒の無業者率と高校（%）

	札幌市	富山県	東京都
10.0%未満	86.9	100.0	91.8
10.0-19.9%	8.2		6.1
20.0-29.9%	3.3		1.6
30.0-39.9%			0.5
40.0-49.9%	1.6		
(N)	61	54	429

ではこうした無業者が生み出される高校は、どのような特徴を持っているのだろうか。平成元年と11年の2年度を取って、各年度において学校を無業者率1割未満と1割以上に分割した上で、無業者率の変化に関して4類型を作り、その特徴を探っていくことにする。類型は、①無業者が常に1割以上である高位シフト型 ②無業者が2時点間で上昇してきた上昇型 ③無業者が常に1割未満の低位シフト型 ④無業者が2時点間で減少してきた減少型、の4つである。

図1-1 無業者の推移に関する4類型



富山県はすべて③のタイプに属したが、札幌市と東京都について、タイプごとに学校の属性を詳しく見ると、表1-3、1-4のようになった。

4類型に分けた学校の属性には、いくつかの特徴が見られる。これらについて、当日詳しいデータを配布する。

表 1-3 札幌市の 4 類型と学科のクロス(%)

	①高位 シフト型	②上昇型 シフト型	③低位 シフト型	④減少型
普通科		53.3	80.0	66.7
専門科		13.3	10.0	
併設	100.0	33.3	10.0	33.3
(N)	2	15	30	3

表 1-4 東京都の 4 類型と学科のクロス(%)

	①高位 シフト型	②上昇型 シフト型	③低位 シフト型	④減少型
普通科	52.9	54.4	80.8	69.2
専門科	29.4	39.2	6.8	7.7
併設	17.6	6.3	12.5	23.1
(N)	17	79	281	13

(大道真佐美)

## 第 2 章 無業者をめぐる進路指導と教育観

### 第 1 節 問題

前章では、高卒無業者が生み出される背景について概観した。この章では「高卒無業者」を生み出す要因を高校進路指導の問題としてとらえ、進路指導の実態と教員の進路指導観の違いと高卒無業者の発生との関係をさぐる。具体的には、産業構造・高卒労働市場等の要因も考慮して東京都、富山県、札幌市の 3 地域の高校教員に対する質問紙調査から考察をすすめる。

### 第 2 節 調査の概要

序章第 2 節③に概略を記した高校教員調査を行った。分析に使用したのは個人の属性や回答内容等に大きな不備のない 426 票である。

### 第 3 節 結果と考察

#### (1) 進路イベント等の実施

進路イベント・進路指導の内容で 3 地域の差がみられたのは「先輩を招いての進路懇話会」、「社会人講師による進路講話」、「職業体験学習」、「希望進路別校内ガイダンス」、「学部・学科、研究者・研究室研究」、「フリーター指導」の実施に関してである。

「先輩を招いての進路懇話会」は「全く実施していない」と認識している割合が札幌で高い。「社会人講師による進路講話」は「全く実施していない」と認識している割合が東京、札幌に比べて富山で低い。「職業体験学習」を実施していると認識している割合は富山で高く、東京、札幌は低い。「希望進路別校内ガイダンス」は「全く実施して

いない」と認識している割合が富山で高く、東京、札幌は低い。「学部・学科、研究者・研究室研究」は「全く実施していない」と認識している割合が富山で低く、東京、札幌は高い。「フリーター指導」を「全く実施していない」と認識している割合は東京、札幌に比べて富山で高い。

これらから、富山は進路行事が他の 2 地域に比べて活発に行われ、就職・進学いずれかに方向付けしようとする指導を行っているという教員の認識があることがうかがえる。

#### (2) 進路学習に関する教材・資料等の利用

進路学習に関する教材・資料等の利用で 3 地域の差がみられたのは「進路適性検査」、「職業適性検査」、「進路ノート」、「進路指導部作成の進路ニュース」、「自校作成データベース」の利用に関してである。

「進路適性検査」を「全く利用していない」と認識している割合が富山で高く、東京、札幌は低い。「職業適性検査」についても「全く利用していない」と認識している割合が富山で高く、東京、札幌は低い。「進路ノート」を「全く利用していない」と認識している割合は、東京が富山、札幌に比べて高い。「進路指導部作成の進路ニュース」を「どの学年でも利用している」割合は札幌で高く、反対に「全く利用していない」割合は富山で高い。「自校作成データベース」を「全く利用していない」割合は富山で高い。これらから、富山はあまり外部の教材・資料等を使わない指導を行っているという教員の認識があることがうかがえる。

#### (3) 「学校として」指導すべき内容について

「学校として」指導すべき内容について 3 地域の差がみられたのは「いろいろな職業の賃金や労働環境」、「アルバイトやパートの仕事に関する情報」の 2 項目に関してである。「いろいろな職業の賃金や労働環境」を「指導しなくてもよい」(「とくに指導しなくてよい」+「あまり指導しなくてよい」)とする割合が東京、札幌に比べて富山で高い。「アルバイトやパートの仕事に関する情報」についても同様に、「指導しなくてもよい」(「とくに指導しなくてよい」+「あまり指導しなくてよい」)とする割合が東京、札幌に比べて富山で高い。これらから、富山では「正社員(正規雇用労働者)として就職することが大切であり、就職した先で精一杯やるのが大切である」という方向付け指導を行っているという教員の認識があることがうかがえる。また、富山では実情としてフリーターの数が多くないため、そうした層を指導する必要性を教員が認識していないとも考えられる。

#### (4) 生徒の考えに対する望ましさ

生徒の考えに対する望ましさについて 3 地域

の差がみられたのは「のんびり暮らしたい」、「将来のことはわからない」、「努力したところで大したことはできない」、「自分らしさがわからない」の4項目に関してである。

生徒の「のんびり暮らしたい」、「将来のことはわからない」という考えに対して否定的(「望ましくない」+「あまり望ましくない」)にとらえる割合は、いずれも富山、札幌に比べて東京が低い。「努力したところで大したことはできない」という考えに対しても同様に、否定的(「望ましくない」+「あまり望ましくない」)にとらえる割合は、富山、札幌に比べて東京が低い。「自分らしさがわからない」という考えに対しては、否定的(「望ましくない」+「あまり望ましくない」)にとらえる割合が東京、富山に比べて札幌で高い。これらから、東京の教員が他の2地域に比べてやや現状容認的認識を持っているといえる。

(5) 進路指導に関する考え方に対する意見  
進路指導に関する考え方に対する意見について3地域の差がみられたのは4項目に関してである(図表省略)。

(6) 進路指導の具体的場面でどうするか  
進路指導の具体的場面でどうするかについて3地域の差がみられたのは7ケースに関してである(図表省略)。

これらのケースに対する回答から、東京では生徒の現状を容認する傾向が他の2地域に比べて強く、進路決定の圧力が弱いといえる。反対に、富山では「進路未決定」あるいは「無業者」の輩出は、学校としてあるいは教員として「恥ずかしい」という意識が強く、その分進路決定の方向付けの圧力が高まると考えられる。

#### 第4節 小括

3地域の比較からは、次のような特徴がうかがえる。東京は進路情報過多ともいえる状況の中、様々な進路イベント・機器の使用を含めた新しい進路学習のツール・教材を使用して指導が行われているが、進路決定の方向付け指導、そうした圧力は弱く、結局は現状肯定的・現状追認的認識を持って指導が行われている。富山はとくに目新しい内容の進路指導は行われておらず、むしろ伝統的ともいえる就職を中心とした進路の方向付け指導が行われ、生徒に対する進路決定の圧力も強い。このような指導を支えているのは県内求人数の多さである。札幌は東京と同じように、様々な進路イベント・機器の使用を含めた新しい進路学習のツール・教材を使用して指導が行われているが、高卒者も含めた労働市場の現状があまりにも悪く、無業者を多数生み出している。結果としての現状

受容といえるのではないだろうか。(長須正明)

### 第3章 進路としての無業者 教師の認識と指導「理論」

#### 第1節 本章の目的

本章の目的は、進路指導部の教員を対象としたインタビュー調査のデータを手がかりに、進路としての無業者をめぐる教員の認識がどのような論理によって支えられているのかを描き出すことにある。生徒たちの進路形成プロセスにおいて、これまで、教員は学校から労働市場、上級学校へのゲートキーパーとして重要な役割を果たすと言われてきたし、実際、果たしてきたと言える。しかし、今日の高卒無業者の増加という進路の実態は、教員たちの進路指導についての認識に変容を迫らずにはいないものがある。学校内部において、実際に進路指導を遂行し、生徒の進路選択の状況を目の当たりにしている進路指導部の教員たちは、「進路としての無業者」をめぐるどのような認識を持ち、また、そのような進路を選択していく生徒たちに対してどのようなまなざしを向けているのだろうか。

#### 第2節 本章の分析枠組…教員の語りへの着目

ところで、第1章及び第2章の分析結果をふまえると、高卒無業者の輩出率において、全く異なる状況にある地域として、東京都と富山県を対置することができる。全く異なる状況とは、まず、就職希望者の受け皿としての労働市場が縮小しているか否かという経済的背景である。そして、学校内部に目を向けると、進路指導の実態や教員の進路指導観における違いとしてあらわれていた。本章では、学校内部において進路指導を遂行している教員の語りに着目する。教員たちの言葉の真偽は問題ではない。学校の、生徒の、なにがしかの実態をめぐる、どのように意味づけを行い、了承しているのか、教員の指導を支える論理を描き出すのである。実態を了承する彼らの意味づけは、その実態についての「正しい」認識ではないかもしれない。しかし、「教員が」意味づけするという点で、その認識は「正しい」ものとなり、むしろ、生徒の無業者という選択を産出する機能へと帰結するのではないだろうか。

本章では、インタビューデータに即して実証的な分析、考察をすすめる。現場の教員の語りに着目した分析は、高卒無業者を主要な関心とする先行研究でほとんど行われていない。この点で、本章の分析は、高卒無業者の研究に重要なインプリケーションをもたらすものである。

### 第3節 多元的な現実を生きる教員たち

インタビュー全般を通じて、「進路としての無業者」に対する明確な否定／肯定の声は教員から聞かれることはなかった。このこと自体考察すべき課題の一つであるが、本節では、ひとまず、具体的なインタビューデータを提示して、教員たちがどのような意味づけを行っているのかみてみよう。なお、対象校は（地域－学校名の五十音順の番号－学科種別：東京－1－普）という形式で以降表示する。引用箇所（ ）内は筆者註、また下線は筆者による。

（1）対象校の進路状況を確認する中で教員の口から「未定者」の特徴が次のように語られた。

その子たち（未定者）は、学校に来るのがやっとです。だから、担任の先生が一生懸命「頑張れよ、頑張れよ」とやって、やっと来ているだけだから、そんな進路のことまで考えられるような子ではない（中略）先生の方がある程度一生懸命になれば、7、80%の生徒の方も一生懸命になる。そういう面では、進路指導があって、生徒の進路が決まっていくことも結構強いです。この未定者の数は、どうすることもできない。まずは卒業だから。（東京－20－専）

（2）「フリーターになる子が学校への関わりが薄いのではないか」という質問に対する教員の回答のなかで語られた「未定者」の特徴である。（1）と同様に「まずは卒業」という生徒の現状認識がある。

フリーターというのは、就職試験は面接だけだし、授業は関係ないし、オール2で卒業すれば、卒業証書を手に入れればいいんだし、目標を低くします（東京－9－普）

この対象校の教員は、「フリーターもやむなし」と言う。その理由をたずねてみた。

自分にあうかどうかいろいろな経験をする、というのはフリーターということでもいいが、20歳を過ぎてまで続くのはおかしい（中略）自分にあった職業、自分にあった生き方を探して、自分にあった生き方を先に見つけたのならば、それにあつた就職口を正社員として探す。正社員の道を、自分は何が一番好きなのかということを探し求めないと人間は向上しない。（東京－9－普）

（3）「進路指導の際に心がけていること」についてたずねたなかで「進路指導のポイントというのは個別指導です。それからどれだけ情報を提供できるかということ」と語った教員に「個別指導」の中身をたずねた。

結局は生徒の自分探しをサポートしなければいけないでしょう。自分が考える場というものを絶対に作らなくてはいけません。今の子は考える場を作らなければ、まず考えないで済ませようとする（中略）いろんな価値観をぶつけていって自分の価値観を持ってもらう、自分なりのことを探してもらうと言うことです。生徒が必要な情報を示さないでいて、生徒が最後に考えることだというのは逃げだと思えます（中略）最後は子どもが自分で考えて決めなくては絶対駄目だと思います。（東京－13－普）

こうしたデータから、無業者の増加という同一の状況におかれた教員たちのあいだに、さまざまな認識が存在することを私たちは知ることができると。すなわち、客観的な数字に基づけば単一の問題系として位置づけられる「高卒無業者（及びその増加）」という現象が、現場の教員たちによって多様な解釈実践が遂行される対象となっている、ということである。進路選択活動を行う一人一人の生徒のさまざまな実態やそれぞれの学校の問題的な状況を文脈として、現場の教員の語りはうまれる。個性重視の原則を学校現場に適した形に読み換えた「自分探しの旅」という象徴的な意味づけだけが流通しているのではない。例えば、「とりあえず卒業」は、ここに提示したデータ以外にも多くみられた語りである。無業者に進路を決定させるという意味での進路指導が成立していないのではない。まずは生徒を学校に来させるという、進路指導以前の問題が生じているのである。進路を決定しない生徒としてではなく、高校生役割を遂行しない生徒として、教員からまなざしを向けられているのが、無業者になっていく生徒たちなのである。

本章では、さらに、富山県との比較、教員たちのさまざまな解釈、さまざまな解釈を産出する文脈へも目を向け、具体的なデータを提示しながら議論をすすめる。（諸田裕子）